

グ・マストを中心とした地空相互作用観測設備とその成果の一部の紹介を行った。笹野はレーザーレーダの境界層観測への応用について述べた。混合層の微細構造を直接みることができ、境界層の観測手段として、今後さらに発展し、普及するものと期待される。安田は従来の接地境界層の理論では不都合の多い、強い安定層中での拡散係数に関し、データ解析を中心とした仕事について述べた。米谷は作物の群落上の乱流特性や物理量のフラックスについて、観測により得られた研究結果を報告した。

山崎は大循環モデルを扱う立場から境界層の重要性について議論し、今後の境界層の研究の方向として、植生のあるときの境界層の観測やモデル化、複雑地形上での境界層の研究などが伸びることを期待していると結んだ。伊藤・星野は、熱線風速計を組み合わせ、過度を直接測定できるセンサーを開発し、フレキシブル・ラフネス上での過度変動の観測結果の報告をした。北林は風洞で安定成層を作り、接地逆転層の厚さや乱流特性を調べた。また複雑地形上の流れの例として、筑波山の模型を用いた安定成層流の実験を紹介した。光本は野外観測の解析により、海風や斜面風が重力流の性質を持っていることを強調した。

木村(富士男)は数値モデルによって、谷の上の風を調べ、乱流と内部波による運動量の鉛直フラックスの性質について述べた。木村(竜治)は衛星写真の連続フィルムを使って、海陸風や湖陸風の日変化を視覚的に見せ

た。また境界層の研究は歴史的にスケールの拡大により発展してきているので、境界層と自由大気を分けて研究することは望ましくないと指摘した。

石川・田中は水面上の風と、波や吹送流との間の相互作用について興味深いレビューを行った。特に波を介した、風から水の流れへのエネルギー輸送は複雑であり、室内実験による解明の努力が現在もつづけられている。宮田は構造物の耐風性を中心とした、風と工学との関係についてレビューを行った。これによると、風速の極値やそのほかの諸特性に関する研究と、構造物などの風の応答に関するものの2つに大別できる。前者は統計的な手法がよく利用され、後者では剝離の問題が重要な課題である。四方・市川は原子力施設からの拡散解析の手法について講演した。風洞実験やポテンシャル流を使った数値モデルの紹介があった。浅井は広域の大気汚染に関し科研費による研究のまとめを話した。さらに境界層の研究や気象学の発展は、気象以外の分野の影響が大きく、広い視野に立たねばならないことを強調した。

最後に竹内は大気境界層研究の展望について述べ、今後の研究を模索する上で、野外観測、模型実験、数値実験の三者がそれぞれどのように特徴を出すか、いろいろな方面への応用も含めて、研究の範囲をどう拡大するか、リモートセンシングなどの新しい観測手段の進展が大切であると述べた。(文中 敬称略)

第10回極域気水圏シンポジウムのお知らせ

昭和基地を中心とした南極域において、現在第28次日本南極地域観測隊によって南極気候研究(ACR)計画が実施されております。国内においては第27次観測隊で終了した東クィーンモッドランド雪氷研究計画(EQGP)の結果の解析が行われております。また、南極中層大気総合観測(MAP)の成果もまともにつつまります。極域気水圏シンポジウムは極域におけるこうした研究観測に関連した成果発表の場として既に9回を数えるに至り、最近ますます活況を呈してきております。さて、より魅力あるシンポジウムのあり方について企画委員会で討議を重ねた結果、昨年度に引き続いて開催期間を2日間とし、従来通りの研究発表形式以外に、一部テーマ制(今年度のテーマ:氷床コアについて)を取り入れ、ま

たポスターセッションも設けることにしております。

つきましては、広く研究発表を受け付けておりますので、ふるって御参加下さいませようお願い申し上げます。

記

日時 昭和62年12月8日(火)～9日(水)

場所 国立極地研究所 講堂

連絡先 国立極地研究所 気水圏シンポジウム係

西尾 文彦

〒173 東京都板橋区加賀 1-9-10

電話 03 (962) 4711

(内) 258

ファックス 03 (962) 2529